

# 業兼本三十六歌仙絵

## 一 はじめに

三十六歌仙の肖像にその和歌など添えて描き連ね、絵巻物の形とした「三十六歌仙絵」は、鎌倉時代流行を生み、佐竹家旧蔵のいわゆる佐竹本を最古例に、以後これに続く数例が残されている。私は、さきに新出の三十六歌仙<sup>1</sup>絵（書伝為相筆）を紹介したが、その中で、同本にみる歌仙像の形式の上から、「時代不同歌合絵」との密接な関係を指摘して、少しく鎌倉時代歌仙絵の系統整理を試みてきた。ここで説こうとする業兼本三十六歌仙絵についても、主として時代不同歌合絵が同本の成立に大きな役割を果していたことなど明らかにし、あわせて業兼本の性格や歌仙絵に於ける位置などについて触れていきたいと思う。

業兼本三十六歌仙絵については、既に早くから森暢氏<sup>2</sup>によって詳細な考証がなされている。以下森氏の説の大略を記してみると、断簡であって全貌の明らかでない業兼本について先ず住吉具慶筆の摸本を提示し<sup>3</sup>、巻末の住吉弘定（弘貫）<sup>4</sup>の識語により、弘貫の時代に切られたもので、

真 保 亨

もとはおそらく二巻本であったとされる。また書の筆者平業兼の伝称については、業兼の他の筆蹟と比べ、業兼筆とする根拠なく、ただ書様の系統を示すにすぎないとされた。絵の描写は、信実にはじまる似絵の影響をうけ、簡潔直截なもので、制作年代は鎌倉中期を下らないと推定された。森氏は、後に再び業兼本<sup>5</sup>について触れられ、書の業兼筆は否定され、筆癖は俊成様の流れを汲むものとされている。絵は信実画風の系統で、佐竹本の描法を更に進めたものと述べられる。原本を忠実に写した具慶の摸本にみる如く、各歌仙は、先ず左方に向って左向きに描き連ね、次に右方に向って右向きに連続描写している。森氏はこの形式が三十六歌仙の左右を新しく絵の上に示した独創的な形式とされ、業兼本に至って新しい段階に入ったのであり、そしてこの歌仙の姿絵が、時代不同歌合絵をはじめ室町から桃山・江戸時代へかけての歌仙絵に影響を与えたと述べておられる。

私は、右の説に対し、制作年代・画風・書風など異議を挿むものではないが、三十六歌仙姿絵の形式については、いささか別途の考察をすすめている。冒頭に述べた如く、本稿では、特に時代不同歌合絵と業兼本三



試みに、その解明の手段として、この不揃いな歌仙の列影形式を、左方と右方の歌仙が互に相対する歌合形式に配置を換えてみると、その原形式が一層明らかになる。即ち一番の人丸・貫之から十八番の兼盛・中務にいたるまで、対向する歌仙像は、いずれも相呼応する如く適合し、図柄の上でも安定感をみせるのである。このことは、業兼本の歌仙像原型が、歌合形式の歌仙絵であったことを示すものと考えられよう。

申すまでもなく、三十六歌仙絵の基づく公任の「三十六人撰」は、藤原清輔の「袋草紙」によると、六条宮具平親王と公任との間に行われた人麿と貫之との優劣論がきっかけとなり、後日人麿貫之十首歌合が行われるなどして、撰出の深い要因になったといわれる。これより「前十五番歌合」及び「三十人撰」を経て、「三十六人撰」成立にいたったのである。これら歌合形式の撰集に絵を付し、絵巻の形とした場合、当然二歌仙がおのおの向き合う歌合形式であったに相違なからう。歌仙を左右二群にわけて、先ず左方のみを連ね、さらに右方のみを列挙するという佐竹本乃至この業兼本の形式も、絵巻二巻に描き両巻を互に引き競べるとすれば物合せとなり、従って歌合形式の一種であろうが、本来のものとは言い難い。絵画に表現される歌合形式とは、左右の歌人が、番えられた歌の優劣を競い合ういわば競技の場面を表わしたもので、組み合わせられた二歌仙が向き合う姿に描かれ、対峙する両者の間に何やら一種はりつめた競合の雰囲気がかもし出されなければならない。

このような二歌仙対向の歌合形式を、遺例の上で求めてみると、時代不同歌合絵や、先に私が紹介した為相本三十六歌仙絵等がある。後者はその歌仙の姿を前者に仰いでいることが知られ、時代不同歌合絵の当代

歌仙絵展開上果した役割の大きさは、先に述べた如くである。<sup>1</sup>

時代不同歌合は、後鳥羽院が配流先の隠岐で撰述したもので、樋口芳麻呂氏によると、後鳥羽院によって数次の改訂がなされ、貞永元年（一二三二）より嘉禎元年（一二三五）の間に第一次成立本から第四次成立本がつくられ、さらに嘉禎二年七月の遠嶋御歌合の作の入った第五次成立本・第六次成立本は、嘉禎二年七月前後と推定された。このうち第五次・第六次成立の後稿本は、祖本が絵巻であった可能性を示唆されている。「明月記」によれば、天福元年（一二三三）八月、九条大納言基家の撰による三十六歌仙の真影を、藤原信実に描かせ隠岐へ奉ったとあり、この時期の後鳥羽院を中心とする歌仙絵制作の盛況が想像されよう。

時代不同歌合絵の現存する遺例は、鎌倉時代中期の旧藪本家本や、同後期の東京国立博物館本、旧藤岡家本、旧毛利家本等いずれも転写本で、原本は早くから失われたものと思われる。しかしこれらを通じて前述したように歌合形式の歌仙絵の基本的な姿を窺うことができるのである。時代不同歌合絵は、鎌倉時代十三世紀の早い時期に成立したと考えられ、以後の歌仙絵に著しい影響を及ぼしたのである。歌仙像の転用による為相本三十六歌仙絵などその好例であろう。私は業兼本三十六歌仙絵もまた時代不同歌合絵の歌仙像を転用して成ったものと考ええる。

### 三 時代不同歌合絵との関係

時代不同歌合絵の鎌倉時代の遺例は、いずれも零本でその全貌を窺えない憾みがある。しかし幸いに、京都国立博物館の探幽縮図の中に首尾完結した一本（挿図2）が残されている。探幽自筆の書込みによると、





則・能宣・兼盛の十一人は、姿も像の向きも同一といってよい。次に貫之・伊勢・赤人・遍昭・素性・友則・小町・忠峯・信明・順の十人は、像の向きをあわせるため反転して用いている。また歌仙像の持物其他細部に若干異同がみられるが、反転するなど転写の際生じたものである。このころ敏行・元輔・中務の三人は、時代不同歌合絵に於ける同人の姿から転用していない。敏行については、時代不同歌合絵が武官としての闕腋袍であるのに対し、業兼本では冠直衣姿に描かれている。これは直衣に表わしたいという作者側の意志が働いたものと思われるが、その姿を、時代不同歌合絵に求めてみると、中納言俊忠が近く、仔細にみるとこれを反転して用いたことがわかる。元輔は業兼本に於て一つ前の十三番の右方である順をそのまま用いている。身体をやや傾斜させ、装束の色彩を変えるなどではいるが、姿・顔付まで等しい。中務は時代不同歌合絵で左方三十番にあり、この像を反転して用いても兼盛と調和しないことがわかる。従って右方三十五番の小侍従をそのまま転用し中務にあてている。

次に時代

め、次に傍に描かれている左二十一の参議源等朝臣を拾い出し左方の公忠としている。十番の斎宮女御・頼基に於ける右方の頼基には、時代不同歌合絵右十六の中納言俊忠をあて、絵巻では隣に描かれる十一番左方の敏行には、この頼基像を反転して用いるという簡単な方法で撰んでいる。次の十二番の左方宗子には、三番前に用いた参議源等朝臣による公忠像を再使用している。次いで十三番左方の清正には、時代不同歌合絵左四十四番の藤原長能を転用し、その右方にはよく形姿の似た源順を反転して使用する。十四番左方の興風は、時代不同歌合絵左三十七番の元輔を転用、これは右方に使うべきであったと思われる。そのため右方元輔には、源順像を再び使用し、さらに十五番右方の元真と十七番右方の忠見にも同じ源順像を少しく装束・持物など変えて扱っているのである。これは、いずれの絵巻にもしばしば見られる如く、制作が巻末に到ってまま生ずる作者の仕事上の倦怠と完了を急ぐ焦りからくるものでなかろうか。十六番の右方仲文も、一度使用した赤人像を反転の上再登場させ、しかも先に転用した像よりも、時代不同歌合絵のそれに近く、前に省略された像の狩衣の尻もそのまま描くなどしている。

以上の如く、業兼本三十六歌仙絵は、時代不同歌合絵の歌仙像を転用按配して成ったものであることが、各像の対

挿図 3 ～ 22 業兼本と時代不同歌合絵歌仙像対照

14 時代不同 深養父	13 業兼本 猿丸	4 時代不同 人丸	3 業兼本 人丸
16 時代不同 兼輔	15 業兼本 兼輔	6 時代不同 躬恒	5 業兼本 躬恒
18 時代不同 敦忠	17 業兼本 敦忠	8 時代不同 家持	7 業兼本 家持
20 時代不同 長能	19 業兼本 清正	10 時代不同 業平	9 業兼本 業平
22 時代不同 元輔	21 業兼本 興風	12 時代不同 素性	11 業兼本 素性

挿図23～42 業兼本と時代不同歌合絵歌仙像対照

業兼本三十六歌仙絵

34 時代不同 友則	33 業兼本 友則	24 時代不同 是則	23 業兼本 是則
36 時代不同 公衡	35 業兼本 高光	26 時代不同 能宣	25 業兼本 能宣
38 時代不同 忠峯	37 業兼本 忠峯	28 時代不同 兼盛	27 業兼本 兼盛
40 時代不同 重之	39 業兼本 重之	30 時代不同 貫之	29 業兼本 貫之
42 時代不同 信明	41 業兼本 信明	32 時代不同 遍昭	31 業兼本 遍昭

挿図43～66 業兼本と時代不同歌合絵歌仙像対照

54 業兼本 公忠	53 業兼本 宗于	44 時代不同 斎宮女御	43 業兼本 斎宮女御
57 業兼本 仲文	56 業兼本 赤人	46 時代不同 右近	45 業兼本 小大君
60 業兼本 頼基	59 業兼本 敏行	48 時代不同 伊勢	47 業兼本 伊勢
63 業兼本 元輔	62 業兼本 順	50 時代不同 小町	49 業兼本 小町
65 業兼本 忠見	64 業兼本 元真	52 時代不同 小侍従	51 業兼本 中務



兼盛 きみにひかれてよろつよやへむ

物やおもふと人のとふまで

貫之 むすふてのしづくにこる山の井の

あかても人にわかれぬるかな

赤人 わかのうらニしほみちくれハかたをなミ

あしへをさしてたつなきわたる

伊勢 おも川たえすなかるゝ水のあはの

うたかた人ニあはてきえめや

遍昭 すゑの露もとのしづくやよのなかの

をくれさきたつためしなるらむ

友則 秋かせニはつかりかねそきこゆなる

たかたまつさをかけてまつらむ

小町 はなのいろはうつりにけりないたつらに

わかみよニふるななめせしまニ

高光 かくはかりへかたくミゆるよのなかニ

うらやましくもすめる月かな

忠峯 ありあけのつれなく



# 五 画風と制作年代

業兼本三十六歌仙絵は、その歌仙像の原型を辿ると、時代不同歌合絵に帰着するのであり、この関係は鎌倉時代に於ける歌

種得な技巧が窺われ、そこに作者の個性のあら



とから生